

表紙絵解題

『澳門番語雜字全本』について

内田慶市

本号の表紙絵は『或問』第17号（「德国图书馆中文藏书述要」）で、北京外国語大学中国海外漢学研究センターの楊慧玲氏が紹介したベルリン前国家図書館所蔵の『澳門番語雜字全本』であるが、今回、ドイツに訪問した際にフランクフルト大学の Iwo Amelung 氏にその複写物を提供されたものである。

この『澳門番語雜字全本』は、以下のような、かつて筆者らが影印出版した紅毛番語＝ピジン関連資料の一つである。

- (1) 『紅毛通用番話』成徳堂（広東？）
- (2) 『紅毛通用番話』璧経堂（広東）
- (3) 『紅毛番話貿易須知』以文堂（台湾中央研究院史語所）
- (4) 『紅毛番話貿易須知』富桂堂（大英図書館、パリ国立図書館）
- (5) 『紅毛買賣通用鬼話』栄徳堂（パリ国立図書館）
- (6) 『夷音輯要』（抄本、架蔵）
- (7) 『大英俗語抄本』（1850?、大英図書館、Or.10886、56葉）
- (8) *Chinese and English*（大英図書館、Or.7428、74葉）

ただし、上記の8種類はいずれも、「中国語-英語」対照語彙集（用語集）であるのに対し、本書は次のように、「中国語・ポルトガル語」となっている。

天 消吾 (céu)、日 梭爐 (sol)、月 龍呀 (lua)、星 意事爹利喇喇 (estrela)、
風 挽度 (vento)、雲 奴皮 (nuvem)、雨 租華 (chuva)、
晴 幫顛布 (tempo bom)、早 賒圖 (cedo)、午 妙的呀 (meio-dia)、
夜 亞內的 (À noite)、半夜 貓亞內的 (meio da noite)、
天黑 耶四孤路 (escuro)、冷 非了 (frio)、熱 堅的 (quente)
東 爹時離 (leste)、南 蘇盧 (sul)、西 賀核時 (oeste)、北 諾的 (norte)
通事 做路巴沙 (tradução) 唐人 之那 (chinês)

(アルファベットのポルトガル語は筆者による)

本書の表紙絵の「番人」は、上の成徳堂(図1)、璧経堂(図2)、栄徳堂(図3)蔵版に酷似しているが、富桂堂(図4)、以文堂(図5)のものとは若干趣を異にしており、このことから前者と後者で時代が異なることが分かる。

本書は「省城第七甫五桂堂蔵板」とあり、広東省で出版されたことが明らかであるが、惜しむらくは11葉の後半以降(食用類の後半以降)が欠けている。

本書も他の紅毛資料と同じように「華夷訳語」の伝統を受けた次のような16類の分類がなされている。

天地類、人物類、身體門、言語通用(フレーズ、センテンスも含む)、買賣問答、穿着門、食用門、物件門、綢緞門、顔色門、洋貨門、銅鐵門、數目門、丈尺門、斤數門、担斗升門

ところで本書は、結論から言えば、以下のかつてウィリアムズが *Chinese Repository* (Vol. VI. Oct. 1837, 276-279 頁)において、その内容について紹介したことのある *Gaoumun fan yu tsa tsze tesuen taou, or A complete collection of the miscellaneous words used in the foreign language of Macao* そのものであると考えられる。(書名で最後の1文字だけが異なっている。『澳門番語雜字全本(套)』特に以下の記述は本書の内容と完全に一致する。

The collection of Portuguese and Chinese words is designed for natives residing at Macao and its vicinity ; and in the compass of thirty-four pages contains upwards of 1200 examples. They are arranged under sixteen heads ; as eatables, social relations, natural objects, buying and selling, furniture, weights, &c.; and under each division there are found words sufficient for the common intercourse of life. The examples are places in columns, and the translation is given in Chinese sounds immediately beneath each one, but in a smaller type. The same character is always employed to represent the same sound. But while the sounds of many of the Portuguese word are expressed so uncouthly, as they are with the rough monosyllables of the Chinese, we don not see how a native can use his acquisitions in conversation without at the same time he learns the pronunciation viva voce. For instance

Imperador, emperor, is sounded, in-pe-la-taw-loo.

Agora, now, is sounded, a-ko-lap.

Gente, a man, is sounded, yen-tik,

Casa, a house, is sounded, kak-tsze.

Carta, a letter, is spunded, keet-ta.

Dentro, within, is sounded, teen-too-loo. (277 頁)

つまり、このポルトガル・中国語の語彙集は、澳門及びその周辺に住むネイティブのために編集されたものであること、全部で 34 ページ、収められた例 (単語等) は 1200 余りで 16 の類に分けて収録されていること、ほぼ普通の通商には十分な語彙数であること、各語の下に、少し小さな文字でポルトガル語の音が付されていて、同じ漢字が同じ音に使用されること、ただし完璧なポルトガル語の音を反映しているわけではなく、あくまでも中国語のラフな単音節的な音であることなどが記されている。また、最後に挙げられた例は、本書では以下のようになっている。

皇帝 燕罷喇多盧

如今 亞哥立

人 因的

屋 家自

書信 吉打

内 連度爐

なお、ウィリアムズのこの記述についてはすでに周振鶴氏も取り上げられたことがあるが、周氏はその中で、更に次のようにも述べている。

ウィリアムズが刊本を見たという 1830 年代当時には「紅毛番話」の中にポルトガル語も多く含まれていたが、後にすべて英語に変わっていった。(中略) しかし最後まで残ったポルトガル語派生の単語もある。例えば、「知道」が「沙吡」となっているのは、saber (知っている) から派生した。この語は使用頻度が非常に高かったため、最後まで消えなかったのだろう。(周振鶴「解題：内田氏が発見した『紅毛番話』『言語接触とピジン』内田慶市・沈国威編著、白帝社、2008 年、277 頁)

この「知道」は、本書では「曉得」が使われ、それに対応するポルトガル語は「撒啡」(「我知價」では「撒備」と表記) という表記になっているが、このような単語が意外と他にもあるかも知れない。

いずれにせよ、本書とそれ以降の英語用語集との比較対照によって、当時のポルトガル語、英語の力関係、あるいは、日常用語の実態を知ることができるわけで、まさに貴重な資料であると言えることができる。

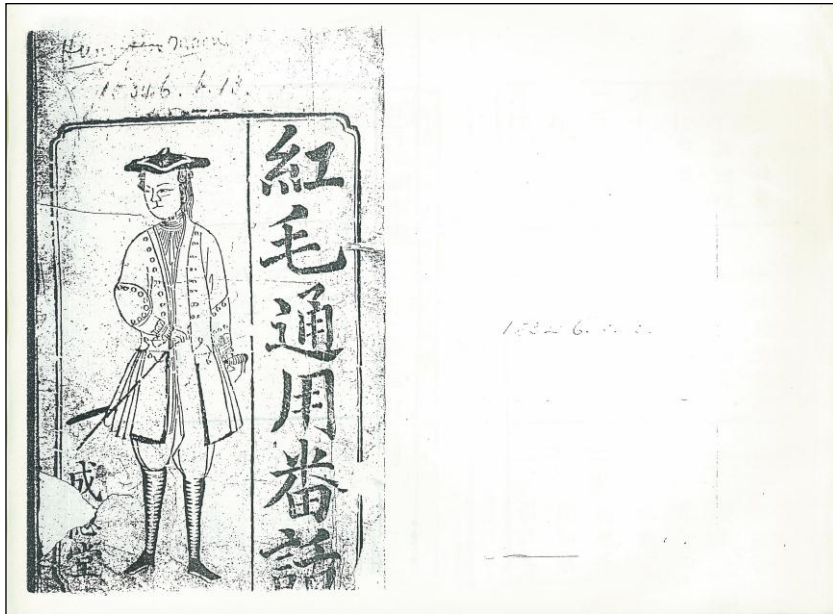


図1 成徳堂蔵版表紙

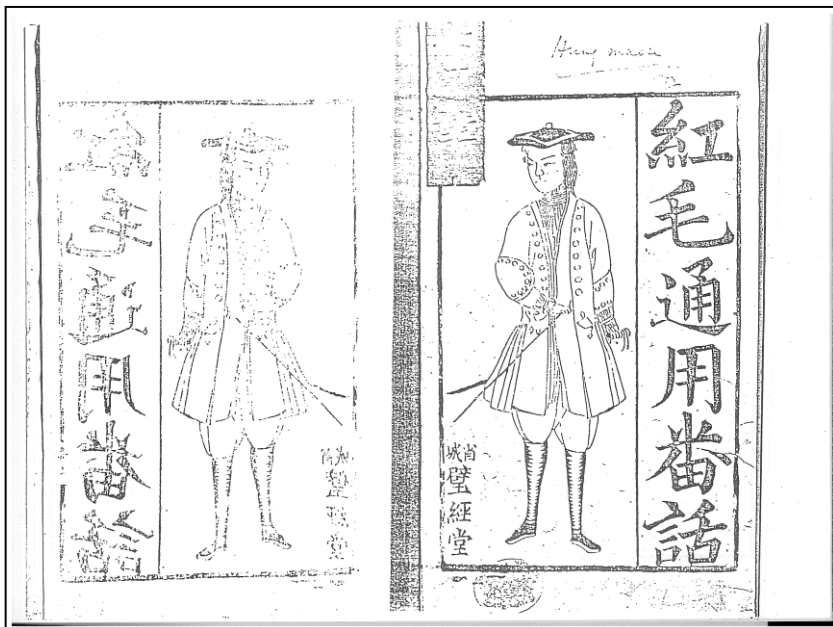


図2 壁經堂蔵版表紙



図3 栄徳堂蔵版表紙



図4 富桂堂蔵版表紙



图 5 以文堂藏版表紙

回家是夜夢漢到他來站立一夜天明其婦對同往者語之同往者
曰伊來讓俺何不置枕他坐今夜之來其婦安神端坐竟來救汝其
婦見其神坐准以安寢子寤語寢睡即夢漢不身就自此木
來其婦忽覺身中有孕產下一女名問故其婦曰夢回遊寺熬其
嬰漢交後夢漢來我家熬夜就有此子想是天降其祥遂信印真算
去問問此子何人其婦曰你親子也夫問何歲曰五歲了夫云
我往西行入載你生兒五歲是我親子夫罵其婦將遂尋情由告訴
其夫竟往寺中認看這不嬰漢把身罵欲回不念以扇將嬰漢打
了此所謂佛激出聲其夢漢因聲曰我睡使睡得來你老婆生野
仔為我肌胎相干何能你将扇來打我

紅毛

話貿易須知

以文堂無訛

